

予備教育課程の国費学部留学生の 学習ツール使用状況

2016～2017年度実施のアンケート調査の結果から見える
スマートフォンアプリの使用目的の多様化と学習スタイルの変化

鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰・藤村知子

【キーワード】 国費学部留学生、学習ツール、スマートフォン、アプリケーション（アプリ）、ウェブサイト、辞書

1. 本稿の目的

本稿の目的は、東京外国語大学留学生日本語教育センター（以下、JLC）国費学部留学生¹予備教育コース（通称「1年コース」）に在籍する学習者が、日本語を学習する際にどのような学習ツールをどのように使用しているのか、アンケート調査によりその実態を明らかにすることである²。さらに、当該コースの教育に携わる教師間においてその結果を共有し、教師の教育支援リテラシー向上の一助とすることを旨とする。

2. 研究の背景

国費学部留学生（以下、学部留学生）には、文部科学省により定められた応募資格・条件がある。例えば、2017年現在、国費学部留学生として予備教育コー

¹ 日本政府（文部科学省）奨学金留学生のうち、学部留学生のこと。来日後、最初の1年間は文部科学省の指定する予備教育機関（東京外国語大学あるいは大阪大学）で大学入学のための集中的な予備教育を受ける。詳細については「国費外国人留学生制度について」（文部科学省 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/06032818.htm）を参照。

² 本稿で報告・考察する学習ツール使用状況についてのアンケート調査は、2016年度および2017年度東京外国語大学留学生日本語教育センター教育研究開発プロジェクト（「留学生の辞書等の学習ツール使用についての実態調査」プロジェクトチーフ：鈴木智美）において実施したものである。同研究は、その後2017年度より日本学術振興会学術研究助成金（科研費）（平成29年度～31年度基盤研究（C）「日本語学習者の学習ツール使用状況の解明と教師の教育支援リテラシーを結ぶ総合的研究」課題番号：17K02842、研究代表者：鈴木智美）を得て発展的に継続・推進することとなった。よって、アンケート調査実施後の分析・考察については、同科研費の助成を得て行われている。研究グループメンバーはいずれも本稿の執筆者の5名である。ただし、JLC教育研究開発プロジェクトのうち2017年度分については鈴木、中村、藤村の3名である。

スで日本語を学習している学習者は、その応募資格・条件における「年齢」の要件から見れば、いずれも1990年代半ば以降(1995年～)に出生した世代である。この年代の学習者は、既に初等・中等教育の段階から、コンピュータに触れ、インターネット環境に日常的に身を置いてきた、いわゆる「デジタルネイティブ」(digital native)世代と言ってもよい。

また、学部留学生は、来日後、最初の1年間は、予備教育機関にて集中的な日本語教育を受けることが定められているため、応募時あるいは来日時に日本語力を有していることは要件とはされていない³。しかし、近年は、日本語学習の経験があり、渡日時において既にある程度の日本語力を身につけているという、いわゆる日本語既習の学部留学生も多くなっている。その背景には、ICT(情報通信技術)の発達による日本語学習環境の変化も影響していることが考えられる。例えば、日本語既習の学部留学生について、来日前の日本語の学習方法や学習形態を確認すると、母国の高校・大学等の学校機関における学習経験を有する者のほかに、インターネット教材や、ウェブ上に開設されている学習交流グループなどを通じて、いわゆる「独学」で日本語を学んできたという学部留学生の姿も少なからず見られるようになってきた。

さらに、来日後、予備教育コースで日本語の集中教育を受けている中でも、ほとんどの学部留学生がいわゆるスマートフォンを所持し、辞書機能などを有した様々なアプリケーション(以下、アプリ)を用いたり、あるいはインターネット上の各種ウェブサイトにアクセスしたりしながら、これを1つの学習ツールとして日常的に頻繁に使用している様が見られるようになってきた。

このような学習者を取りまく学習環境や、学習者自身の学習スタイルの変化の中で、予備教育課程における学部留学生たちは、実際のところ、ふだんどのような学習ツールをどのように使用しているのだろうか。その実態について詳細に確認し、コースの教育に携わる教師間で共有し、その教育方法へと生かしていく必要があるのではないかと考えられる。

学習者の学習ツールの使用に関する先行研究では、例えば鈴木(2012)は、日本国内の大学(東京外国語大学)にて全学的に開講されている日本語プログラムの受講生(交換留学生や研究生)を対象に、主として辞書の使用についての調査

³ 日本語についての条件としては、「積極的に日本語を学習しようとする意欲のある者」および「原則として日本語で大学教育を受けようとする者」とされている。

を行っている。伊藤他(2016)は、海外で日本語を学ぶ学習者のインターネット利用について調査を行っている。また、渋谷・清水(2017)では、日本国内の日本語学校の学習者および教師を対象に、学習ツール全般にわたったアンケート調査を行っている。このように、いくつかの調査は行われているものの、予備教育コースに在籍する国費学部留学生の学習ツールの使用に焦点を当てた調査はまだ行われていない。

3. 調査の方法

3. 1 調査の概要

JLC 国費学部留学生予備教育コース在籍の学習者を対象に、オンラインアンケート方式で調査を行った。オンラインアンケート方式を採用したのは、使用しているインターネット上の学習サイトや各種アプリなどについて、回答者にはそのサイトあるいはアプリのダウンロード先 URL を回答欄に直接コピー&ペーストしてもらうことで、それらの学習ツールを正確に特定できるように考えたものである。調査の概要は以下の通りである。

(1) 調査概要

- a. 調査時期：2016年12月、および2017年7月⁴
- b. 調査参加者：全84名(2016年度35名、2017年度49名)
うち有効回答数83(2016年度34回答、2017年度49回答)
- c. 調査方法：
 - ① 無記名式アンケート⁵、eラーニングシステム「JPLANG」⁶を通じて実施
 - ② 共通IDでログイン後、アンケートの概要説明を確認し、同意の上回答を開始、回答時間はおよそ20分～30分⁷、終了後お礼として文房具を渡す⁸

⁴ いずれも、学期末に行われるコースの評価アンケートと同時に実施した。

⁵ 詳細を確認したい場合に、インタビュー調査に協力が可能であれば、アンケート末尾に連絡先を記してもらうこととした。

⁶ 「JPLANG」は、東京外国語大学留学生日本語教育センターおよび情報処理センターの共同開発による日本語学習のためのeラーニング教材サイトである(<https://jplang.tufs.ac.jp>)。学習管理システム(LMS)における「課題」の出題・提出機能を利用することで、オンラインアンケート調査の実施が可能である。

⁷ 例外的に、最も短い回答時間として約10分、最も長い回答時間として約45分の例が見られた。

⁸ いずれの回も、協力のお礼に文房具(ノートとペン、約240円相当)を渡すことにした。

調査対象とする学習ツールは、電子辞書、スマートフォン等のアプリ、各種ウェブサイトである。また、動画視聴やSNS利用などのその他の活動も広い意味で学習リソースを用いた活動として、調査の対象とした。質問項目は、ふだん具体的にどのような学習ツールを、どの程度使用しているか、使用ツールの種類と具体的なツール名および使用頻度、そのツールを使用して何を行っているかという使用目的、またそれらのツールの利便性等について、どのように評価するかなどである。

回答者の内訳は、下記の通りであった。

表1 アンケート回答者内訳(有効回答数83)

		2016年度 (回答数34)	2017年度 (回答数49)	計 (回答数83)
男女別 ⁹	男	20	29	49
	女	14	17	31
専攻 ¹⁰	文科系	16	23	39
	理科系	18	23	42
国・地域数 ¹¹		24	27	39
来日時 日本語 既習度 ¹²	超既習(N1取得レベル)	17	17	50
	既習(N3～N2取得レベル)		16	
	半既習(N4～N5取得レベル) ～未習	17 【調査時:N3～N2レベル】	13 【調査時:N4レベル】	30

なお、2016年度はコース後半の12月に、2017年度はコース前半が終了した7月の時点で調査を行っている。したがって、来日時に日本語が「未習」であった学習者は、2016年度の調査時においては中級後半(N3～N2レベル)に、2017年度においては、初級終了のおおよそN4レベルに相当するレベルとなっている。

⁹ 性別について記入のなかった回答数は、2016年度はなし、2017年度は3であった。

¹⁰ 専攻について記入のなかった回答数は、2016年度はなし、2017年度は3であった。

¹¹ 国・地域について記入のなかった回答数は、2016年度は1、2017年度は6であった。

¹² 日本語の既習度については、入学時に行うプレイメントテストの結果による在籍クラス名で回答することとした。記入のなかった回答数は、2016年度はなし、2017年度は3であった。

3. 2 アンケートの構成

アンケートは、下記の図1に示すように、A(電子辞書について)、B(アプリについて)、C(ウェブサイトについて)、D(動画視聴やSNS利用など、その他の活動について)と、4つの部分から構成される。B(アプリ)およびC(ウェブサイト)の部分では、よく使用するツールが複数ある場合には、最大3つまで回答することが可能である。その場合、個々のツールについて同一内容の質問に複数回、回答することになる。使用しているツールが特になければ、AからBへ、BからCへと、順に次の質問に進む。

質問項目数は、A(電子辞書)については8項目、B(アプリ)8項目、C(ウェブサイト)7項目、D(その他の活動)2項目、計25項目である¹³。

学習ツール使用についてのアンケート:全体構造	
【説明文】	
I. 学習ツールについての質問	
A. 電子辞書について 持っているか・使うかどうか(一使わない人は質問Bへ) 【電子辞書について】質問	
B. スマートフォンやコンピュータのアプリケーションについて(最大3つまで回答) 使うかどうか(一使わない人は質問Cへ) 【アプリについて】質問その1 まだほかにある人はその2へ、ほかにない人はCへ 【アプリについて】質問その2(1と同じ) まだほかにある人はその3へ、ほかにない人はCへ 【アプリについて】質問その3(1と同じ)	
C. ウェブサイトについて(最大3つまで回答) 使うかどうか(一使わない人は質問Dへ) 【ウェブサイトについて】質問その1 まだほかにある人はその2へ、ほかにない人はDへ 【ウェブサイトについて】質問その2(1と同じ) まだほかにある人はその3へ、ほかにない人はDへ 【ウェブサイトについて】質問その3(1と同じ)	
D. その他の活動について	
II. 回答者自身についての質問 日本語レベル、母語、日本語学習の動機など	
【インタビュー調査協力の可否・問い合わせ先など】	

図1 オンラインアンケートの全体構造

¹³ この「質問項目数」は、B(アプリ)およびC(ウェブサイト)における、複数のツールに関する同一質問を重複して数えない数である。また選択式の質問において「その他」等の回答を選んだ場合、その内容の詳細を問う下位質問が付随するが、これも数えない数である。

最後に、回答者自身のプロフィール（母語、日本語の既習レベル、日本語学習の動機など）について回答してもらう部分がある。より詳細にツール使用状況を確認したい場合に、インタビュー調査に協力が可能かどうかを選択してもらう欄も設けた¹⁴。

4. 調査結果の概要

第4節では、アンケート結果について、その概要を報告する。以下、電子辞書、アプリ、ウェブサイトの順に述べ、さらに、スマートフォン等の表示言語をどのように設定しているか、またSNSなどを含めたその他の活動についてどのような回答が見られたかについても簡単に述べる。なお、このうちアプリについては、第5節であらためて詳述する。

4. 1 電子辞書

電子辞書を所有しているという回答者は、83名中9名のみであった¹⁵。その使用者はさらに少なく、ふだん日本語を勉強する時に、電子辞書を「非常によく使う」との回答は4、「時々使う」との回答が2で、計6名のみが使用しているとのことであった。また、所有してはいるものの「あまり使わない」との回答者も3名見られた。

電子辞書を所有している9名については、その国籍・母語、あるいは日本語レベル等において特に目立った特徴は見られない。来日時の日本語レベルは未習から超級にまでわたる。ただし、所有しているが「あまり使わない」と回答した3名は、いずれも来日時の日本語レベルは超級であった。電子辞書に搭載されている各種辞書の中で、よく使われているのは、英和、和英、国語、漢字の各辞典、および学習者の母語と日本語との対訳辞書であり、これについても特に目立った特徴は見られなかった。また、複数の辞書の一括検索を利用しているとの回答は

¹⁴ いずれの年度も、1年間（4月～3月）のコース在籍期間において、中途の7月あるいは12月に調査を行っている。これまでのところ、調査参加者の在籍期間中に補足インタビュー調査は行っていないが、本稿における考察結果もふまえ、確認したい事項等が生じた場合には、今後あらたにインタビュー調査を追加依頼する可能性は残されている。

¹⁵ 電子辞書のイラストを付し、「あなたは自分の電子辞書を持っていますか」との質問を設定したところ、「持っている」との回答は11あった。しかし、どのメーカーの電子辞書かとの問いに、うち2名はスマートフォンの具体的なアプリ名、あるいは単に「スマホ」と回答しており、いわゆる「電子辞書」ではないものについて、勘違いにより「持っている」と回答したものであることが確認できた。

1名のみであった。

学習ツールの中でも「辞書」使用の状況は、変化が大きい。鈴木(2012)では、東京外国語大学で開講されている交換留学生等を対象とした日本語プログラムにおいて、その受講生を対象に各種辞書の使用状況についてアンケート調査を行った結果が報告されているが、当時、117名の回答者のうち約7割の回答者が電子辞書をよく使うと回答している¹⁶とのことであった。その調査結果と比べると、日本語学習者における電子辞書の使用状況については、10年にも満たないうちに顕著な変化が見られ、現状では電子辞書の使用はかなり少数派となっていると言えるのではないだろうか¹⁷。

4.2 アプリ

「日本語を勉強する時、スマートフォンやコンピュータのアプリケーションを使いますか」との質問に対し、「非常によく使う」との回答が52と最多であり、「よく使う」との回答が19、「時々使う」が2、「あまり使わない」が5、「まったく使わない」が4であった。「まったく使わない」と回答した4名の学習者の国籍・母語は様々であるが、うち3名は来日時の日本語レベルは超級レベルであった。

具体的なアプリ名を挙げてもらったところ、アプリを使わないと答えた9名を除き、74名の回答者が何らかのアプリ名を挙げて回答しており、そのうち2つのアプリを挙げた回答者が31名、3つのアプリを挙げた回答者はそのうちさらに8名あった。合計すると、よく使うツールとして、延べ100以上のアプリが挙げられたことになる。これらのアプリは、スマートフォンにダウンロードして使用しているという回答が多く、タブレットやノートパソコン、あるいはデスクトップコンピュータで使用しているとの回答は相対的に少ない¹⁸。

挙げられたアプリ名は、実際に確認できたもので約50種あり、今回のアンケート調査で調査の対象とした学習ツール(電子辞書、アプリ、ウェブサイト)

¹⁶ 「非常によく使う」から「まったく使わない」まで5段階の評定尺度を用いており、「非常によく使う」が62名、「よく使う」が21名の回答となっている。

¹⁷ アンケートを作成・実施する際、主として教師側の視点から、よりオーソドックスで基本的なものと考え、「電子辞書」に関する質問をアンケート項目の最初に設定したが、回答する学習者の側から見れば、これは現状においてあまり馴染みのないツールであるということがわかった。スマートフォンのアプリ等との勘違いも、いわばもはや「電子辞書」というツールをよく知らないという点から生じているものと思われる。

¹⁸ スマートフォン(iPhoneおよびAndroid端末)で使っているとの回答が延べ112回答、タブレットやコンピュータ、ノートパソコンで使っているとの回答は延べ55回答であった。

の中では、最も豊富なバリエーションが見られた。回答数の多かったアプリは、「Japanese」(13回答)、「imiwa?」(13回答)、「Anki」(10回答)という3つのアプリであった¹⁹。アプリ使用の詳細については、第5節で詳述する。

4.3 ウェブサイト

「日本語を勉強する時、ウェブサイトを使いますか」との質問に対し、「非常によく使う」との回答は13、「よく使う」との回答が11、「時々使う」が24で最多であり、「あまり使わない」が11、「まったく使わない」が13であった。アプリと比較すると、その使用率は分散している。

「まったく使わない」と回答した13名のうち、12名はアプリについては「非常によく使う」あるいは「よく使う」と回答している²⁰。「時々使う」と回答した24名を見ると、その大半の20名はアプリについては「非常によく使う」と回答し、また3名は「よく使う」としている²¹。このことから、ウェブサイトについては、アプリ使用を補完するような役割で用いられていることがうかがわれる。

具体的なサイト名を挙げてもらったところ、49名が回答しており、そのうち2つのサイトを挙げた回答者が9名、そのうちさらに3つまで挙げた回答者も1名見られた。回答数の多かったサイトは、「Google translate」(12回答)、「jisho.org」(8回答)、「weblio」(7回答)、「JPLANG」(7回答)という4種のサイトであった²²。「JPLANG」など、コースにおける使用教材²³と連動したサイトが挙げられている

¹⁹ 「Japanese」は英日・日英辞書を中心としたアプリで、フラッシュカードによる学習機能も有している。13名中12名はiOS端末対応のアプリ、1名はAndroid端末対応のアプリを使用している。「imiwa?」は、iPhone/iPad対応の多言語対応日本語辞書、「Anki」はフラッシュカード式で記憶・暗記をサポートするアプリである。

²⁰ 1名はアプリについても「あまり使わない」と回答しており、また電子辞書も所有・使用しておらず、辞書機能を有するどのようなツールを日常的に用いているのかは不明である。日本語能力試験N1レベルに合格した既習者であるため、ふだん特に「日本語を勉強する」という意識を持っていないことも考えられる。

²¹ 1名はアプリも「あまり使わない」との回答であった。

²² 「Google translate」(<https://translate.google.co.jp/?hl=ja>)は多言語対応の翻訳サイト、「jisho.org」(<http://jisho.org>)は日英対訳オンライン辞書である。「weblio辞書」(<https://www.weblio.jp>)は、英和・和英、日中・中日、日韓・韓日、ほか各国語の辞書、類語・対義語辞典などの各種辞典、および百科事典の検索サービスサイトである。「JPLANG」(<https://jplang.tufs.ac.jp>)は、注6に記したようにJLCおよび東京外大情報処理センター共同開発による日本語学習のためのeラーニング教材のサイトである。

²³ 予備教育コースで使用されている日本語教科書は、いずれも東京外国語大学留学生日本語教育センター編著の『初級日本語』『中級日本語』『上級日本語』であり、JPLANGはこのうち初級および中級の教科書に準拠したeラーニング教材である。コース入学時に既にN1レベルを取得していた既習者は、初級・中級レベルの学習にこの「JPLANG」を使用していないため、このサイトを挙げた回答者の中には含まれていない。

点に特徴が見られる。

「そのウェブサイトを使ってどんなことをするか」については、「その他」を含め全25の選択肢からあてはまる回答をすべて選ぶ多肢選択式である。本研究では、学習ツールの使用目的を知るために、各ツールについてその具体的な使用内容を確認することになっている。ふだんその学習ツールをどのように使用しているのか、アンケートで問われた場合に、その使用目的を自らの確に説明することが難しいことも考えられるため、選択肢は、各ツールについてそれぞれに想定される使用目的をできるだけ広範囲にカバーするように挙げることとし、さらに1つ1つの項目については平易で明快な文によって示すよう工夫した。

ウェブサイトについての選択肢と、挙げられた全サイトについての総回答数は、以下の表2の通りである。

表2 ウェブサイトの使用目的および回答数一覧

番号	選択肢	回答数
1	自分の母語や英語の言葉に対する日本語の訳を調べる	33
2	自分の母語や英語で文・文章を書いて、日本語に翻訳する	18
3	日本語の言葉の意味を調べる	26
4	日本語の言葉の使い方を調べる	25
5	ある日本語の言葉と似ている意味の日本語の言葉(類義語)をさがす	17
6	使いたい日本語の表現がどれぐらい多く使われているかを調べる	14
7	日本語のコロケーション(どんな言葉とどんな言葉を、よくいっしょに使うか)を調べる	19
8	日本語の言葉を入力して、その言葉が使われているいろいろな文章をさがして、読む	12
9	漢字の書き方や読み方を調べる	18
10	漢字や、漢字の部首(漢字の部分)の意味を調べる	17
11	漢字を登録し、自分の漢字リストを作る	2
12	漢字をおぼえる練習をする	0
13	日本語の言葉の発音やアクセントを聞く	14
14	日本語の言葉の発音を練習する	10
15	言葉を登録し、自分の語彙リストを作る	1
16	言葉をおぼえる練習をする	4

17	日本語の文法について調べる、文法の説明をさがす	10
18	文法ドリルで練習する	9
19	読解の練習をする	8
20	聴解の練習をする	9
21	会話や短い表現の例を調べる	9
22	会話や短い表現の練習をする	7
23	日本語能力試験の練習をする	3
24	日本の社会や文化、歴史などについて調べる	6
25	その他	4

「自分の母語や英語の言葉に対する日本語の訳を調べる」(33回答)が最も多く、「日本語の言葉の意味を調べる」(26回答)、「日本語の言葉の使い方を調べる」(25回答)、が続き、辞書としての用途が多いことがわかる。その他、「日本語のコロケーション(どんな言葉とどんな言葉を、よくいっしょに使うか)を調べる」(19回答)²⁴、「漢字の書き方や読み方を調べる」(18回答)、「自分の母語や英語で文・文章を書いて、日本語に翻訳する」(18回答)、「ある日本語の言葉と似ている意味の日本語の言葉(類義語)をさがす」(17回答)²⁵、「漢字や、漢字の部首(漢字の部分)の意味を調べる」(17回答)のように、コロケーションや類義語の情報を探したり、漢字の書き方・読み方や意味を調べたり、文・文章を翻訳するなど、それぞれ特定の用途に各ウェブサイトを用いている様子が見えてくる。

また、そのサイトの良い点については、「その他」を含め全15の選択肢がある。「操作がしやすい」(40回答)、「説明がわかりやすい」(30回答)、「入っている情報が多い」(28回答)などが多くの回答を得た。一方、そのサイトの不便な点については、「不便な点はない」(27回答)が最も多かった。使いにくいサイトであれば、当然使われなくなることが考えられ、よく使うサイトについて回答するのであれば、特に不便な点はないという回答が多いのも納得できる。

²⁴ コロケーションを調べるとした回答では「jisho.org」や「weblio」が挙がっている。

²⁵ 類義語を調べるとした回答では、「weblio」、「jisho.org」のほか、「naver」(韓日・日韓辞書サイト)も挙がっている。

4. 4 スマートフォンなどの表示言語

「スマートフォンの表示言語を何語にしていますか」という問いに対し、表示言語を「英語」にしているとの回答が31と最も多く、「日本語」にしているとの回答が19、「日本語と英語の併記」が17、その他が13、無回答が3であった。「その他」の場合は、韓国語やタイ語、またその他の欧州言語等、それぞれの母語により表示しているとのことである。

表示言語をどのように設定して使用しているかは、その機器がどこで購入されたものであるかにもよる。一方、購入当初は母語あるいは英語で表示していたが、日本に留学して勉学を続ける中で、ある時期に日本語に切り替えたということも生じるかもしれない。あるいは、留学期間の長さに関わらず、国際共通語としての英語は継続的に使用し、機器の表示はそのまま英語にしておくということも考えられる。

周囲の環境の中で、機器の表示言語をどのように選択していくのかは興味深い点であるため、詳細についてはさらに調査を続けたい。

4. 5 その他の活動

日本語を使って、ふだんのような活動をしているか、あてはまるものをすべて選んでもらう多肢選択式設問である。選択肢は全12である。日本語を使用する種々の活動も、広い意味で学習をサポートする活動、あるいは学習活動そのものであると考え、その状況を探ってみた。最も回答の多かったものは、「日本語のテレビ番組や映画、いろいろな動画を見る」(54回答)で、次いで「日本人の友だちや知り合いと日本語で話す」(50回答)、「外国人の友だちや知り合いと日本語で話す」(49回答)、「日本語の歌を聞いたり、歌ったりする」(48回答)、「SNSを使って、記事を読んだり、コメントしたり、メッセージを送ったり、日本語で会話をしたりする」(46回答)、「日本語のまんがを読んだり、アニメを見たりする」(44回答)、「日本語で書かれた本を読む」(42回答)であった。この項目の回答詳細については、稿を改めて報告・考察を行うこととしたい。

5. アプリ使用についての詳細

本節では、電子辞書、アプリ、ウェブサイトのうち、最も使用率が高かった学習ツールであるアプリの調査結果について、その詳細を述べる。まず、各種アプリの使用目的についての調査結果を述べ、特に回答数の多かった上位3つのアプ

リについては、それらの使用目的の違いについても見る。次に、よく使用するアプリについて、学習者がどのように評価しているかについて見る。

5. 1 アプリの使用目的

アプリの使用目的については、全22の選択肢から当てはまるものすべてに回答してもらう多肢選択式である。選択肢と挙げられた全アプリについての総回答数は、以下の表3の通りである。

表3 アプリの使用目的および回答数一覧

番号	選択肢	回答数
1	自分の母語や英語の言葉に対する日本語の訳を調べる	73
2	日本語の言葉の意味を調べる	84
3	日本語の言葉の使い方を調べる	63
4	ある日本語の言葉と似ている意味の日本語の言葉(類義語)をさがす	31
5	漢字の書き方や、漢字の筆順(線を書く順番)を調べる	62
6	漢字の読み方を調べる	75
7	漢字や、漢字の部首(漢字の部分)の意味を調べる	44
8	1つの漢字から、その漢字を使った言葉にどんなものがあるかを調べる	45
9	自分で漢字を組み合わせて、その言葉が日本語にあるかどうかを調べる	38
10	漢字を登録し、自分の漢字リストを作る	36
11	漢字をおぼえる練習をする	38
12	日本語の言葉の発音やアクセントを聞く	12
13	日本語の言葉の発音を練習する	10
14	言葉を登録し、自分の語彙リストを作る	35
15	言葉をおぼえる練習をする	28
16	文法ドリルで練習する	16
17	読解の練習をする	8
18	聴解の練習をする	6
19	会話や短い表現の例を調べる	16

20	会話や短い表現の練習をする	6
21	日本語能力試験の練習をする	9
22	その他	6

このうち、回答数が多かった上位5つを抽出すると、次の表4の通りである。

表4 アプリの使用目的：上位1～5位

順位	選択肢	回答数
1	日本語の言葉の意味を調べる	84
2	漢字の読み方を調べる	75
3	自分の母語や英語の言葉に対する日本語の訳を調べる	73
4	日本語の言葉の使い方を調べる	63
5	漢字の書き方や、漢字の筆順(線を書く順番)を調べる	62

アプリは言葉の意味や言葉の使い方、漢字の読み方や書き方などを調べることを目的に、辞書としての用途によく使われていることがわかる。また、「1つの漢字から、その漢字を使った言葉にどんなものがあるかを調べる」(表3の使用目的「8」、回答数45)や、「自分で漢字を組み合わせて、その言葉が日本語にあるかどうかを調べる」(同上「9」、回答数38)など、多くの学習者が、アプリを使用して、ある漢字をもとに、そこからの確かな日本語の言葉を探していくという工夫を行っているとの回答も注目される²⁶。

²⁶ 鈴木(2016)では、スマートフォンの辞書アプリ選択の要件として、ある漢字が語中のどの位置に含まれていても、その漢字を含む漢語や漢字熟語等が検索可能であること(例えば、「味」という漢字を含む語句として「趣味」「意味」「味覚」「興味深い」「味わう」などすべてが検索可能であること)を挙げていた調査協力者があったこと、また鈴木(2013)では、ある上級学習者が、例えば「音楽CDにある曲が“入っている”」ことを漢語を使って表現したい場合に、「掲載」「搭載」などの既知の語から、「載」を使った適当な漢語表現がないかを探っていくという指摘を行っていることが述べられている。全文検索のできない電子辞書とは異なり、辞書アプリはこのような探索的な語句検索法に適しているのではないかと考えられ、どのぐらいの学習者が同様の工夫を行っているかを探るため、これらの選択肢を作成した。

アプリの使用目的として回答数が少なかったもの²⁷は以下の通りである。

表5 アプリの使用目的：下位1～5位

順位	選択肢	回答数
1	聴解の練習をする	6
2	会話や短い表現の練習をする	6
3	読解の練習をする	8
4	日本語の言葉の発音を練習する	10
5	日本語能力試験の練習をする	10

アプリの使用目的として少ないものは、発音・読解・聴解・会話・日本語能力試験などの「練習」タイプのものであることがわかる。このような練習には、ある程度まとまった時間をかけて、集中して取り組む必要があること、あるいは練習の際に自ら発声する必要があることなどの共通の特徴が観察される。このような目的にアプリが使用されることが少ないということは、アプリが使用されるのが、集中して問題に解答したり、自ら声を出して練習したりということに、特に適した環境であるとは限らないということを示しているのではないと思われる。

このように、アプリの使用目的についての調査結果を見ると、アプリを使用して行う日本語学習の内容とは、言葉の意味や言葉の使い方、漢字の読み方や書き方などを調べるといった、単純で短時間で手早く行えるものが多いということがわかる。スマートフォンにインストールしたアプリを使って、例えば寮の自室以外の場所でも、いつでも手軽に使えるツールとして使用していることが考えられる。逆に、声を出して行う練習や、静かで集中できる場所で行う必要のある練習など、使用の場所を選ぶものや、一定程度の時間を要する活動は、アプリでは行われにくいのだろうと思われる。

²⁷ 「その他」を選択した数は除いている。「その他」の具体的な使用目的としては、「漢字検定の準備やビジネス日本語の表現を学ぶ」(weblilo)などが挙げられている。また、「理科や日本社会についての面白いビデオがたくさんある」(NHK for school)という回答も見られた。これはウェブ版の「NHK for School」(<http://www.nhk.or.jp/school/>)をそのまま見ているということではなく、スマートフォン(Android端末)に「NHK for School」というアプリ(NHK, Japan Broadcasting corp.作成)をインストールして使用しているということであると考えられる。

この点は、ウェブサイトと比較するとより明確になる。ウェブサイトの使用目的を見ると、アプリでは順位の低かった聴解や読解、発音などの練習が、回答数の順位としては実は中程度（回答数8～10）に位置している（4.3節の表2参照）。ウェブサイトの使用目的で回答数の少なかった下位3つの項目は、「漢字を登録し、自分の漢字リストを作る」（2回答）、「言葉を登録し、自分の語彙リストを作る」（1回答）、「漢字をおぼえる練習をする」（0回答）というように、言葉や漢字のリストを作成することや、単純な繰り返し練習であった。このような点を考えると、辞書的な機能以外の「学習」という面において、アプリを使った学習は、自室以外でも短時間でできるような学習であり、ウェブサイトを使うのは情報検索のため、あるいはある程度の時間をかけて集中して行うタイプの練習というように、用途に応じた使い分けがなされている状況がうかがえる。

5. 2 使用率の高いアプリ3種の使用目的の違い

ここでは、4.2節で述べた使用回答数の多かった上位3つのアプリ（「Japanese」、「imiwa?」、「Anki」）の使用目的の違いについて述べる。以下、表内の「J」は「Japanese」、「im」は「imiwa?」、「An」は「Anki」を示す。各アプリ略称の次の（ ）内の数字は使用していると回答した人数である。当該のアプリの全使用者数のうち、その目的でアプリを使用していると回答した回答者の割合を百分率で示している。

表6 使用率の高い3つのアプリ：使用目的および回答者の割合

番号	選択肢	J (13)	im (13)	An (10)
1	自分の母語や英語の言葉に対する日本語の訳を調べる	92 %	85 %	0 %
2	日本語の言葉の意味を調べる	92 %	92 %	0 %
3	日本語の言葉の使い方を調べる	77 %	85 %	0 %
4	ある日本語の言葉と似ている意味の日本語の言葉（類義語）をさがす	46 %	38 %	0 %
5	漢字の書き方や、漢字の筆順（線を書く順番）を調べる	85 %	69 %	0 %
6	漢字の読み方を調べる	85 %	77 %	0 %
7	漢字や、漢字の部首（漢字の部分）の意味を調べる	69 %	38 %	10 %

8	1つの漢字から、その漢字を使った言葉にどんなものがあるかを調べる	62 %	54 %	10 %
9	自分で漢字を組み合わせて、その言葉が日本語にあるかどうかを調べる	62 %	46 %	0 %
10	漢字を登録し、自分の漢字リストを作る	77 %	23 %	60 %
11	漢字をおぼえる練習をする	46 %	15 %	90 %
12	日本語の言葉の発音やアクセントを聞く	0 %	8 %	20 %
13	日本語の言葉の発音を練習する	0 %	0 %	50 %
14	言葉を登録し、自分の語彙リストを作る	62 %	23 %	70 %
15	言葉をおぼえる練習をする	8 %	15 %	100 %
16	文法ドリルで練習する	0 %	15 %	50 %
17	読解の練習をする	0 %	8 %	20 %
18	聴解の練習をする	0 %	8 %	20 %
19	会話や短い表現の例を調べる	0 %	23 %	30 %
20	会話や短い表現の練習をする	0 %	8 %	0 %
21	日本語能力試験の練習をする	0 %	8 %	10 %

まず、大きな違いは「Japanese」および「imiwa?」というアプリと、「Anki」というアプリとの違いである。「Anki」は、その名が示す通り²⁸、言葉などを暗記するための機能が充実しており、日本語の学習では特に、漢字や語彙を覚えるために用いられている（上記使用目的一覧における「11」「15」など）。しかし、「Anki」には辞書機能がないため、辞書としての使用は全くない（「1」～「6」など）。また、単に暗記するだけでなく、文法ドリルの練習ができる機能も持つことが特徴的である（「16」）。

一方、互いに似た機能を持つ「Japanese」と「imiwa?」にも、若干の違いが見られた。言葉を調べるという目的ではどちらも使用率が高いが、「Japanese」は主に「漢字」に関する項目での使用が多く（「5」「6」「7」など）、漢字や言葉のリストを作るという目的で使用される割合も、「imiwa?」を上回っている（「10」「14」）。一方、「imiwa?」は会話や表現の例を調べたり、それを練習したり（「19」「20」）、あるいは文法ドリルや聴解などの技能別の練習をする（「16」「17」「18」）という項目で、

²⁸ 日本語の「暗記」に基づいて命名されたフリーソフトである。

使用者の割合としては少ないながらも「Japanese」にはない用途が見られる。このように、似たような機能を持つ「Japanese」と「imiwa?」でも、使用目的を詳細に見ると違いがあることがわかる。

さらに、「Japanese」「imiwa?」「Anki」の3つのアプリのうち2つを併用している学習者も見られ、「Japanese」と「Anki」の併用が4名、「imiwa?」と「Anki」の併用が1名、「Japanese」と「imiwa?」の併用も1名見られた。ここからは、同一の学習者がそれぞれのアプリの特徴を知り、使い分けている様子も見てとれる²⁹。

5. 3 アプリに対する評価

5. 3. 1 良い点

それぞれのアプリはどのように評価されているだろうか。そのアプリの良い点については、下記表7に挙げたように、全11の選択肢から当てはまるものすべてに回答する多肢選択式である。

表7 アプリの良い点および回答数一覧

番号	選択肢	回答数
1	説明がくわしい	33
2	説明がわかりやすい	65
3	入っている情報が多い	52
4	入っている情報が新しい	34
5	日本語の例文が多い	46
6	例文の文脈がわかりやすい	36
7	母語(あるいは英語など)の言葉の日本語の訳がすぐわかる	53
8	操作がしやすい	94
9	楽しい、おもしろい	29
10	便利な機能がある	37
11	その他	4

以下、表8にこのうち回答数が多かった上位6つの項目を挙げる。

²⁹ 使用者数の多い、いわゆる人気のアプリを複数併用している学習者には、その使い分けの詳細を今後確認したい。

表8 アプリの良い点：上位1～6位

順位	選択肢	回答数
1	操作がしやすい	94
2	説明がわかりやすい	65
3	母語(あるいは英語など)の言葉の日本語の訳がすぐわかる	53
4	入っている情報が多い	52
5	日本語の例文が多い	46
6	便利な機能がある	37

この結果を見ると、操作性に対する評価(「操作がしやすい」)が最も多いことがわかる。アプリはスマートフォンにダウンロードして使用することが多く、スマートフォンの小さな画面上でストレスなく操作可能であること、またアプリの使用目的からもうかがえるように、いつでもどこでも、短時間でも手軽に利用できることなどを考えると、操作性が良くないものは継続的な使用にはつながらないと思われる。

評価順位第6位の「便利な機能がある」に関しては、具体的にどんな点が便利なのかも回答を求めた。このうち、特に多かったのは「入力方法」「覚え方」「漢字」に関する回答であった。また、「便利な機能」だけでなく、「その他」についてもその詳細を聞いており、これらの回答のいくつかを、まとめて以下の表9に示す。各回答の末尾の「」内はアプリ名である。回答は回答者が入力した原文のまま示す。なお、6名は詳細について回答はなかった。

表9 アプリの便利な機能、およびその他の良い点

〈便利な機能：入力方法について〉
<ul style="list-style-type: none"> ・ If I copy anything in Japanese and open the app, it automatically translates. 「imiwa?」 ・ このアプリはクリップボードにコピーされた文を自動的に読み込めて分析して使った言葉の意味が出せます。「imiwa?」 ・ Can recognize the kanji I written on the screen of my phone most of the time, even when the stroke orders are incorrect or my handwriting on screen is bad. 「Google translate」 ・ input kanji directly using finger on the screen「Japanese」 ・ Being able to write a kanji manually when you don't know how to read it. 「Yomiwa」

<ul style="list-style-type: none"> ・ 部首検索、音読検索「JED」 ・ 漢字を手で書いて、アプリケーションがチェックします。「Obenkyo」
〈便利な機能：覚え方〉
<ul style="list-style-type: none"> ・ i can memorize as much information as i want「Anki」 ・ リスト作られこと「Japanese」 ・ 気になる単語がBookmarkできる「伊和・和伊中辞典」 ・ flash cards for verbs, kanji, vocabulary「Shirabe jisho」
〈便利な機能：漢字について〉
<ul style="list-style-type: none"> ・ The how to read function, onyomi and kunyomi. 「imiwa?」 ・ Has information on the radicals of kanji and their meaning. Contains a memorizing hint by connecting the radicals into a story that related to the meaning of the kanji. Make kanji easier to understand.「Kanji Alive」 ・ It shows how to write kanjis and how they can be used with other kanjis in sentences. There are also examples.「Obenkyo」
〈その他〉
<ul style="list-style-type: none"> ・ 辞書系だけではなく文法のほかの形が探せる「imiwa?」 ・ 日本語で書いたサイトにあるテキストの上にマウスを据えるとその言葉の意味と読み方が出ます「rikaikun」

アプリの便利な機能、およびその他の良い点として、やはり操作性に関するコメントが多いことがわかる。例えば、日本で生活し勉学を続けていく中で、学習者は頻繁に読み方がわからない漢字に出会うことが考えられる。そのような際、手書きなどで簡単に入力でき、それを認識して即座に読み方を示してくれるアプリは非常に有用であると言えるだろう。日常的にツールを必要とする場面に遭遇する中で、手軽に機能的に使えるものであることが、そのアプリの高評価につながっていると思われる。

5. 3. 2 不便な点

アプリの不便な点については、「不便な点はない」、「調べたい言葉が入っていない」、「例文が少ない」、「例文がわかりにくい」、「訳が正しくないことがある」、「説明が正しくないことがある」、「自分の母語の訳がない」、「その他」の8つの選択肢から当てはまるものすべてに回答する多肢選択式である。以下、表10に回答数の多かった上位1～6位の回答を示す。

表 10 アプリの不便な点：上位 1～6 位

順位	選択肢	回答数
1	不便な点はない	35
2	例文が少ない	33
3	その他	18
4	調べたい言葉が入っていない	17
5	訳が正しくないことがある	16
6	自分の母語の訳がない	16

最も多かった回答は、4.3 節でウェブサイトについて見たのと同様に「不便な点はない」であり、よく使用しているアプリに対しては大きな不満は持っていない学習者が多いようである。一方で、「不便な点はない」とほぼ同数で「例文が少ない」が挙げられている。ある言葉の、場面に合った正しい使い方や、似た言葉との使い分けといった細かい情報までは、2017 年現在の既存のアプリで調べるのは難しい点もあるようである。反対に、「その他」の意見として「多く(=多)過ぎるので、一番適当な使い方をよく迷ってしまう」(「weblio 類語辞典」)、「動詞の活用(ます系、可能系、受け身など)が全部出てくるので、時々蛇足の情報が多い」(「JED」³⁰)という意見もあり、情報が多すぎることで必要な情報がつかめなくなってしまうという点は問題としてとらえられているようである。

ほかに「その他」の意見として多かったのは、やはり広い意味での操作性に関するコメントであり、特に未知の漢字についての情報にいかにか容易にアクセスできるかという点は、アプリにとって大きなポイントであるということがわかる。具体的に、「漢字を探すのは難しいです。書き順番がわからなければ、探せない」(「Japanese」)、「手で画面に漢字を書くことができないが、部首で書くことができる」(「imiwa?」)、「漢字の音と訓がわからない場合は調べにくい」(「Dio Dict4 JPN-KOR Dictionary」³¹)といった、漢字を調べる際に書き順や読み方がわからないと調べられないという点が挙げられている。

³⁰ 「JED-Japanese Dictionary」は、Android 端末対応の英日・日英辞書アプリである。漢字の筆順などもアニメーションで示される。

³¹ 「Dio Dict4 JPN-KOR Dictionary」は、Android 端末対応の韓日・日韓辞書アプリである。

6. まとめと今後の課題

以上、本稿では、東京外国語大学留学生日本語教育センターにおける国費学部留学生予備教育コース(1年コース)に在籍する学習者が、日本語を学習する際にどのような学習ツールをどのように使用しているのかについて、2016～2017年度の2回にわたってアンケート調査を行った結果について報告し、学習ツール使用の実態について考察した。

顕著な結果として浮かび上がってきたのは、各種アプリ使用の拡大と定着の様相である。学習ツールとしてスマートフォンのアプリが、学習者の中に確実に浸透している様が見てとれる。おそらくこれは不可逆的な状況であり、ICT(情報通信技術)の発達による使用ツールの変化は、以前の状況へと逆戻りすることはないであろうと思われる。

このような結果は、日本語学習の環境がデジタル化するとともに、いつでもどこでも、手軽に短時間で情報を得ることができるというように、学習そのものがユビキタス(遍在)化していることを示しているとも言えるのではないだろうか。ツールの発達に呼応して、学習者の学習スタイルも同時に変化していることがうかがわれる。

教師たちも、学習者をとりまく環境、および学習者の学習スタイルの現状を把握した上で、教師であるからこそできることは何か、今一度再考する時期が訪れているのではないかと考えられる。

今後、詳細に確認したい点としては、これらのいわゆる便利なツールを使用してもなお、学習上につまずきが生じるとしたら、それはどのような点なのかということである。鈴木(2017)では、各種ツールの利便性と、学習者の産出する日本語の正確さ・適切さとの間に齟齬が生じる可能性があることも指摘されている。例えば、使用しているツールによって得られた情報が不十分であることを認識していても、その範囲内でとりあえず済ませるという消極的・妥協的な検索行動が習慣化してしまえば、検索の利便性あるいは簡便性を優先し、言語表現そのものの正確さや適切さについてはさほど追求・重視しないという学習習慣が身につけてしまう危険性はないだろうか、ICT時代ならではの「誤用」の問題の再浮上も指摘されている。学習者によっては、情報が不十分であるということ自体の認識がないままになってしまうというようなこともあるかもしれない。このような点に今一度着目することも、教室においてどのように効果的な教育活動を行っていけばよいかを考えるきっかけになるだろう。

そのほかに、学習者によるツールの選択の過程についても、例えば学習者はどのようにして気に入ったアプリにたどり着くのか、それまでにどのぐらいのアプリを試用しているのか、アプリ選択とその定着の経緯なども詳細に確認してみたい課題である。

参考文献

- (1) 伊藤英明・石井容子・武田素子・山下悠貴乃 (2016) 「日本語学習者のネット利用状況と学習サイトへの期待—海外 11 拠点の調査結果から—」『国際交流基金日本語教育紀要』第 12 号 pp.97-104
- (2) 渋谷博子・清水由貴子 (2017) 「日本語学習者および教師への学習ツールに関する調査—デジタル時代の教師の役割とは—」『日本語教育研究』63 号 pp.34-49
- (3) 鈴木智美 (2012) 「留学生の辞書使用についての実態調査—東京外国語大学で学ぶ留学生へのアンケート調査の結果と分析—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 38 号 pp.1-16
- (4) 鈴木智美 (2013) 「日本語学習者のための辞書使用のスキル養成のポイント—留学生の辞書使用に関するアンケート調査自由記述欄の SCAT による質的分析を通して—」『東京外国語大学論集』第 86 号 pp.131-158
- (5) 鈴木智美 (2016) 「日本語学習者は辞書からどのように言葉を探すのか—中級・中上級日本語学習者 7 名の辞書使用についての調査報告事例から—」東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』第 6 号 pp.1-23
- (6) 鈴木智美 (2017) 「辞書ツールは文法的正確さの産出につながるか—ICT 時代の日本語学習者の効果的な辞書使用を考えるために—」『日本語教育と日本研究におけるイノベーション及び社会的インパクト』(第 11 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集) 香港日本語教育研究会 pp.129-147

Usage Situations of Learning Tools among Pre-Undergraduate Students on the MEXT Scholarship: Smartphone Apps and Change of Learning Styles

SUZUKI Tomomi, SHIMIZU Yukiko, SHIBUYA Hiroko,
NAKAMURA Akira, FUJIMURA Tomoko

Key Words: pre-undergraduate students on the MEXT scholarship, learning tools,
smartphone apps, websites, dictionaries

The purpose of this paper is to find out what kind of learning tools pre-undergraduate students at the Japanese Language Center for International Students (JLC) at Tokyo University of Foreign Studies use when they study Japanese, and how they use them, so that the results may help teachers improve their education support literacy.

Such students are “digital natives.” In recent years, some of them had taught themselves Japanese, using Internet teaching materials and study groups before they came to Japan.

In December 2016 and July 2017 we administered online questionnaires and asked JLC students their usage situations of learning tools such as electronic dictionaries, smartphone apps, websites, video sites, etc. We also asked them how useful they were and had them evaluate them.

We have found that smartphone apps have firmly established themselves as learning tools. The digitization of Japanese learning environments and the ubiquitousness of computer access may be influencing their changing learning styles.